



## 特集 自立支援に向けて

### 「OT（作業療法士）とくっ…」

作業療法士 森 由美子

OTになり、八年目を迎えた今年度、思いがけなく特別養護老人ホームを訪問指導させて頂くお話があった。七年間病院に閉じこもっていた私は、自分が勉強させて頂く気持ちでお引き受けした。しかし、まず、さて、何しよう…。

老人病院での七年間で、病院、特に老人病院のOTについては、自分の中でそれなりの理論ができていたつもりであった。OT学生の臨床実習指導でも、私なりの理論を伝えて来た。ところがいざ外に出てみると、そこにはやはり、病院とは異なる世界が存在する。私が病院の中で関わってきた患者さんが、おそらく生涯を終えるまで生活していられるであろう場があるのである。もちろん、中には病院でその生涯を終えられる方もみえる。となると、病院も病院としての機能を果たす反面、生活の場であるわけだが、そこでの生活は何かしらず中途半端なものになってしまっている。しかし、施設はそうではない。そこには、私たちが送るのと変わらない生活があるので。

本来の意味での「生活」とは、そしてその場となる「ホーム」とは何であるのか。OTとして私がすべきことは何であるのか、そして何ができるのか、何をさせて頂くのか。一つ一つの疑問に対し、そこに生活する人々に教えられ、共に考えさせて頂きたいと思っている。

# 自立の援助をめざして

リハビリ委員会主任

大窪 明美

サンビレッジ新生苑では、開苑当時より、やっってもらうより自分でやった方が喜びである、という思いから、リハビリテーションに力を入れてきました。廊下続きの病院へリハビリに通い、本格的に訓練を行うことも出来、又、早くからリハビリ専門の担当職員を置き、病院にて訓練方法の指導を受け、ベッドサイドで出来る訓練や、離床にも力を入れてきました。

しかし、寝たきり体験を通し、寝たきり防止にと力を入れている離床が、利用者にとって安楽に出来ているのか、又、自立援助の方法はこれで良いのかと、疑問が出てくるようになりました。自立をめざし、充実した生活を送れるよう、利用者の立場に立った援助が出来るように、専門家の指導を受け、学ぼうと、各棟より各職種が集まり、平成八年度よりリハビリ委員会が出来ました。

現在、理学療法士、作業療法士、

言語療法士がそれぞれ月に一回、心理士には非常勤にて週三回関わってもらっています。

理学療法は、機能回復がどこまで可能かを診てもらい、それに対する訓練方法の中から、日常生活での効果的な関わり方の指導を受けたり、基本的な身体の動きの実技指導を受け、利用者にとっても介護者にとっても、安楽で安全な生活方法を学ぶミニ研修会を行っています。

作業療法は、日常生活の中で障害とうまく付き合いながら生活していく為の指導や、安楽な体位で離床する為の工夫や、自立した生活を送る為の自助具のアドバイス。

言語療法は、言葉の出にくい方とのコミュニケーションのとり方や、発語訓練を、個別指導や、グループ指導しています。又、言語障害についての理解を深める為の勉強会も行っています。

臨床心理は、今年度からの取り



組みではじまったばかりですが、利用者の心理面への援助をしています。

それぞれの専門家の適切なアドバイスを受けることにより、利用者の新しい一面を発見することもあります。

言語療法を受けることで、まったく違った一面を発見出来たN氏の例を紹介します。

N氏は、明治生まれの男性で、とても頑固で人の輪の中に入ることを拒む方でした。言葉が出にくい事もあり、気に入らない事があれば、車椅子ごと相手にぶつかっていく暴力的な行動があったり、こちらの話すことは、ある程度理

解出来るのに聞こうとせず、大声をあげたりといった具合で、うまくコミュニケーションがとれない為、言語療法の指導を受けました。その中でN氏は、四、五人のグループの級長となり、訓練がスムーズに行えるよう気配りが出来るようになりました。N氏のリーダー性のある一面が発見出来た事で、職員は毎日の生活の中で、N氏に役割を持ってもらうような声かけをするようにしました。そのことで、N氏は人の輪の中にも入られるようになり、笑顔で過ごされることが多くなりました。どんなに体調がすぐれない時でも言語訓練を楽しみにしておられ、その日はとても誇らしげです。

専門家と連携をとることにより、利用者の可能性を発見出来たり、又、関わり方を学び、日々の介護の中に生かし、介護者側が満足するだけの介護でなく、利用者の方が安楽で安心できる介護を提供出来ます。今後は、より幅広く各専門職と連携をとり、利用者の自立援助をめざし、よりよい介護を提供出来るよう学んでいきたいと考えております。

# 医療からの自立支援

新生病院理学療法士

北村 歌子

病院のリハビリ室は、急性期の、障害をより助長しない為のベッドポジションの指導から始まって、機能回復の治療が私達の仕事です。患者さんが受けられた障害の中には、ほとんど回復するものから、障害と共に生きなければならぬ程度まで、それぞれに違いがあります。加齢現象という避けられないものの上に、怪我や病気による障害が重なるのですから、本人は無論、家族も大変なものです。しかし、急性期のショック状態の時は兎も角、生きなければ、もっと云えば生きているのですから、お腹は減る、食べれば出る、身体は代謝だけでも汚れてくる、そして自分の意志が伝わらなければ苦しい、この毎日繰り返しされる現実を、なんとかしなければなりません。そこから立ち直ろうとする身体の動きが出て来るのです。回復しようとする身体の動きを感じて、努力したらなんとかなるか、心も動き出すのです。そして汗と涙の戦いが始まるのです。全然動かなかった足がちよっと動いた、どうしても



出なかった言葉がふっと出た、その喜びで又頑張れるのです。そしてその人にどれだけの機能が残されているのか、そしてそれをどれだけ引き出せるかが、患者さんと私達の二人三脚の機能回復訓練レースなのです。精一杯努力しても、なかなか元に戻らない部分が残ります。それが障害です。その後の人生を、その障害を少しでも改善しながら、障害と共に前向きに生きる時、社会的支援を受け、その人が無理のない自立生活を獲得し、生きていて良かった日を送って頂く為に、衣食の動きを助ける自動具の活用法から、住宅の改造や移動法、そして心のケアまでと病院リハビリ室も、障害者とその家族と共に、より一層努力してゆきたいと思っ居ります。

# 「〜したい」気持ちをもう一度！

心理療法士

蒲生 紀子

「このころのケア」を仕事としてサンビレッジへ来て、3ヶ月になろうとしています。週3日入苑者の方と散歩をしながらお話を聞かせてもらっています。散歩に「どちらへ行きましょうか？」と毎回尋ねますが、どなたも決まって「連れていってもらえる方がいい」と答えられます。それでは、行ってみたい方向が無いのかと思えば、ちゃんどなたも要望はあるのです。「せっかくだから、あなたの行きたい方へ行きましょう」と繰り返し促すと、遠慮がちに行く方向を指で指されるようになります。連れていってもらう立場なのに、自分の要望を述べるのは気が引ける、嫌われるのではないかと心配されるようです。他人に介護を受ける立場の人特有の心情なのでしょう。

入苑される時には、それまで使っていた家具、衣類等の生活用品ともに暮らした家族、親しかった友人などにひとまずの別れを告げられたことでしょう。私にはもう

一つの別れ―「〜したい」気持ち―との別れをして入苑されているように思えます。「〜したい」気持ちはアイスクリームが食べたいといったことやふるさとへ行ってみいたいことなどその人その人によって様々な「〜したい」気持ちがあるだろうと思います。そんな「〜したい」気持ちに入苑者の方がもう一度再会できるようお手伝いできたらと思っております。



## 心を響かせるために

言語療法士

立木 一美

「こんにちは」と私が声をかけても、視線が合う程度で反応の少なかったAさんと初めてお会いしたのが、二年前のこと。Aさんは、脳梗塞による右半身麻痺がありました。「ちょっとね」「どうも」「そうそう」の言葉がでる程度。左脳の言語中枢が損傷され重い失語症となり、思っている言葉が出てこなかったり、人の言っている言葉が理解できなかつたりして、職員との意志疎通も難しいようでした。月一回の言語指導日に同じ失語症の方を集めてグループを作り、Aさんにも参加していただきました。いつの間にか、長時間車椅子で座っていることができるようになり、毎月、おしゃれなブラウスを着て、積極的に課題に取り組み、言葉がでなくとも、いきいきとした表情で参加されています。

生活の場であるわけですから、訓練というより、言葉にとらわれず、交流の機会を提供し、職員の方とは、適切なコミュニケーション方法に

ついて検討しています。

グループの参加者同志、心が通いあってきたので、トーンチャイムという楽器演奏に挑戦です。この楽器の優れた特徴は、片手でも演奏でき、音色に広がりや深さがあり、ひとりひとり音の違うチャイムを使えば、グループでメロディを演奏することができます。サングレージの行事の中で演奏会を開けるようグループの方と練習に励んでいます。



## 「寄付金」感謝を込めて御報告致します。

平成八年四月～平成九年六月

## 個人

水野海二	佐藤直美
赤松美代子	香田進
高橋春美	高橋正二
山田幸子	清水春美
新川一仁	鈴木雅子
長井敏彦	宮木良子
加納敏郎	太田英一
清水和幸	村田徹
河村勝	江村謙吾
坪井隆行	丹羽清子
駒月妙子	児玉豊
林玲子	林芳郎
香田正人	松久和博
竹中ユキ	竹中勝一
宮川助一	小川和彦
金丸義敬	正田
小池尚	澤田重信
石田忠人	

## 団体

大洞堂  
滋賀県ホームヘルプ協会  
神戸町カラオケクラブ  
揖斐郡教育会  
揖斐郡教務主任会  
松山医療福祉専門学校  
田口福寿会  
清洲会  
さわやか福祉ネットワーク  
てんぐや  
養老町日赤奉仕団  
一宮市日赤奉仕団富士分団  
東神電気(株)  
石原美智子 他職員七名講演料  
新生会会員 百一十二名

(敬称略・順不同)

ご厚意は福祉に役立たせていただきました。

ありがとうございます。